

『ホスピスの番人』

私たちのホスピスには、色々な場所にフクロウが居る。と言っても、それは、掌に乗せられるほどの小さなサイズの手作りのお人形さんで、病棟の窓際に置かれていたり、談話室のテーブルに置かれていたり、時には患者さんのお部屋にお邪魔していたりする。フクロウたちは、木の上に停まり、色々な表情をしていて、眺めていると何となく心和む。このフクロウたちの産みの親であり、それらをホスピスに届けてくれたのは、Nさんの奥様である。

Nさんは、私たちの病院がホスピスを開設してまもなくの時に入院された。2年前から喉の異変に気づき、ある病院で検査を受けたところ、中咽頭癌と診断され、放射線治療を受けた。約1年後、腰痛が出現し、腰の骨への転移が見つかった。もう一度、放射線治療を受けたが、少しずつ悪化し、骨の腫瘍は脊髄の神経を圧迫して、徐々に足は麻痺を来とし、歩くことも難しくなった。さらに癌は咽頭部にも再発し、これ以上の治療が難しいという判断のもとに、私たちのホスピスへ入院となったのである。ちょうど1週間前に竣工式を終えたばかりの真新しい病棟にNさんは入院した。

Nさんは病気について真実を伝えられていなかった。即ち、癌であることははっきりと告げられていなかった。入院した日、淡々と症状を説明してはくれたが、何となく不安げな表情でもあった。Nさんの主な症状は腰から足にかけての痛みであり、また、咽頭部に腫瘍の再発を認めていることから、飲み込みが悪く、食事や水を飲むときにしばしばむせこんでいた。いくつかの薬を使い、痛みは何とかコントロールできたが、一方で肺炎を繰り返した。妻は毎日病室に泊り込み、懸命に夫を支えた。



入院して2週間ほど経ったある日のこと、いつものようにお部屋へ伺ったが、この時、Nさんは前の病院の看護師さんが前日見舞いに来てくれたことを教えてくれた。そして、これまでの治療のことを振り返り、話してくれた。じっくりと話を聴いた後、私は率直に「Nさん、本当に大変でしたね」と声をかけた。その言葉を受けて、Nさんは感極まったようにポロポロと涙を流し、横に居た妻も思わず涙した。いつも比較的、冷静に接してくれたNさんだったが、さまざまな思いが凝縮された瞬間だったのかもしれない。

その後のNさんの病状は、思いがけないくらい早いスピードで悪化した。考え得る、あらゆる方法で対処したが、病状の進行を抑える事はできなかった。Nさんの身体の辛さは極限に達しており、少しずつ鎮静剤を使い、眠らせることで苦痛を緩和せざるを得なかった。ご家族の見守る中、Nさんは少しずつ眠りに入り、その後は穏やかな時間を過ごした。そして、約1週間後、永遠の眠りについたのである。

Nさんが旅立ってからしばらくして、奥様が病院を訪ねてこられた。夫と共に過ごしたホスピスでの生活は、2人にとって大切な、しかし辛い別れの時間でもあった。その場所を再び訪れるには、きっと時間が必要だったことだと思う。そんな奥様がフクロウたちを連れて、病院に来られた。1人で過ごしているとくよくよしてしまうし、何かをして気を紛らわそうと思いつき、作り始めたとのことだった。フクロウが停まっている木の枝もさまざまな形をしているが、これらはお元気な頃にNさんとドライブに行った際に一緒に拾ってきたものと教えてくれた。この手作りのフクロウたちは実はNさん夫婦の協同作品であり、私は2人の絆の象徴であるように感じた。

奥様は言われた。「先生の一言で、人前で泣いたことの無いあの人が初めて涙を見せたんですよ。優しい言葉をかけられて、嬉しかったんですね。」と。



この時のことは奥様にとっても忘れられないシーンだったようである。もちろん、私にとっても…。あの時、何気ない一言だったが、張り詰めていたNさんの気持ちが、ほんの一瞬でも楽になったのかもしれない。

さて、Nさん夫婦のフクロウたちは、今も元気にしている。少しずつ仲間も増えているようだ。ある時、ホスピスに入院していた患者さんの妹さんたちが言われていた。既に患者さんは意識がほとんど無い厳しい状態だったが、そんな時、病室に居るのがせつなくて、1階の談話室で休んでいた時にあのフクロウが目に入り、自分の辛い思いを聴いてもらっていたのだと。彼女たちは、ボランティアが開いている絵手紙教室に参加して、フクロウを描き、患者さんの退院と共に、その葉書を大事そうに持ち帰った。

フクロウたちは、ホスピスの番人として、私たちや患者さんを守ってくれているだけでなく、ご家族の気持ちを癒してくれていた。あの時のNさんが伝えたかったことが今に繋がっている。フクロウさん、いつもありがとう。